

京都大学若手人材海外派遣事業 ジョン万プログラム（職員派遣）
令和元年度事務職員短期派遣プログラム報告書

研 修 者	職 名	企画・情報部国際交流課 掛員
	氏 名	山本 翔
研 修 先 等	渡 航 先 国 名	ドイツ
	研 修 先 機 関 名	京都大学欧州拠点
	研 修 期 間	平成 31 年 3 月 25 日～令和 2 年 3 月 20 日
具体的な研修内容	<p>ジョン万プログラムによる派遣職員として欧州拠点に着任し、「職員の国際化」というミッションのもと、約 1 年間に及ぶ実地研修を経験した。その集大成として、「欧州で学ぶ」と題した留学生支援に関する一考察をまとめたことをここに報告する。左記の具体的な研修内容については、次頁以降の報告書に織り交ぜつつ、論を展開しているため、主に「3. ジョン万職員としての研修」を参照されたい。なお、本稿は以下 8 つの章立てにより成り立つ。</p> <p style="text-align: center;">ジョン万職員の考察「欧州で学ぶ」</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. はたして留学は必要か 2. 学生を取り巻く現状 3. ジョン万職員としての研修 4. 欧州における学生の流動性 5. 欧州諸国の事例収集 6. 本学学生の留学体験談 7. どうして留学が必要か 8. 今後の展望 <p>また、本稿のあとがきとして、新型コロナウイルスの感染拡大による欧州拠点を取り巻く日常の変化について、少しだけ触れることにした。筆者が現地で捉えた社会の移り変わりを記したため、参考いただきたい。</p>	
本学の国際化に対する研修成果の活用方法・フィードバック	<p>上述の章立てに基づいて考察を進め、最終章「8. 今後の展望」にて、研修生による一考察から得られた知見を記した。これをもって、左記の本学の国際化に対する研修成果の活用方法・フィードバックに代えることをご容赦いただきたい。拠点駐在中に収集した客観的事実を中心としつつ、ジョン万職員として自ら研修機会を創出し、学び培った経験を随所に散りばめて執筆した。本稿でまとめた研修成果が、学生支援、ひいては教育支援に携わる方々に、効果的に活用されていくことを願いたい。</p>	

まえがき

具体的な考察に入る前に、ここではジョン万職員として拠点業務を通じ得られた、主たる研修機会について述べたい。計 11 回に亘る各種イベントの主催や参加を通じて得た研修機会について、以下のとおり簡潔に列挙する。イベントの主催や、学生・教職員に向けた本学紹介プレゼンテーション、そして留学フェアでのブース対応等と大変幅広く、貴重な経験を得た。もちろん、これら以外にも拠点の活動は非常に活発で、多岐に亘る。例えば、年間を通じて大学等を訪問して教育研究に係る情報交換を行い、計 12 回もの出張機会を得ることができた。このうち 2 回は単独出張で、次頁以降の考察において詳しく紹介するため、ここでの割愛をご容赦いただきたい。それでは、次頁より本報告書の本題に入る。

● 拠点業務を通じて得た主たる研修機会（イベントを抜粋）

開催	イベント	ジョン万職員としての主な業務
4 月	HeKKSaGOn 副学長会議 (国際ネットワーク関係)	<ul style="list-style-type: none"> 京都からの出張者対応、スケジュール管理 本学を代表しての会議参加、議事録作成
5 月	Staff Training Week (スタッフ研修プログラム)	<ul style="list-style-type: none"> 他大学関係者からの情報収集、人脈づくり 欧州拠点の業務やジョン万の役割紹介
6 月	日独ジョイントレクチャー (学術・研究者交流の推進)	<ul style="list-style-type: none"> プログラム準備、各方面への広報活動 受付・講演者対応、当日のレクチャー運営
7 月	留学生向け渡日前説明会 (受入留学生の現地支援)	<ul style="list-style-type: none"> プログラム準備、本学学生との協同 当日の説明会運営、プレゼンテーション
9 月	欧州拠点 5 周年記念式典 (拠点活動 5 年の集大成)	<ul style="list-style-type: none"> プログラムや招待状、ケータリング準備 当日の式典運営、プレゼンテーション
	HeKKSaGOn 学長会議 (国際ネットワーク推進)	<ul style="list-style-type: none"> 京都からの出張者対応、スケジュール管理 本学を代表して会議参加、人脈づくり
	International Networking Conference (拠点ネットワーク推進)	<ul style="list-style-type: none"> ワークショップでの議論や情報交換 本学を代表して会議参加、人脈づくり
	EAIE (全学学生交流協定の推進)	<ul style="list-style-type: none"> 締結先候補の絞り込み、人脈づくり 当日の速記、議事録の作成
10 月	日本学科留学説明会 (受入留学生の現地支援)	<ul style="list-style-type: none"> イベント運営への応援、協力 相談ブースでの学生対応
11 月	ルクセンブルク留学フェア (現地学生への本学紹介)	<ul style="list-style-type: none"> 本学の概要や留学制度の紹介 相談ブースでの学生対応
12 月	Season's Greetings 作成 (拠点ネットワーク推進)	<ul style="list-style-type: none"> レター作成、宛先の更新や整理 原稿の執筆、取りまとめと発送

欧州で学ぶ —ジョン万職員による一考察—

1. はたして留学は必要か

はたして留学は必要か、言葉尻だけを捉えると各方面から集中砲火を浴びそうだ。本稿は、決して留学生を巡る諸施策を批判する類のものではない。本学に入職して7年、一貫して学生支援に携わってきた職員として、長らく自分自身にこの問いを投げかけてきた。これまで留学生派遣や受入れ支援の業務に直接関わった経験はないものの、日々の窓口対応を通じた学生との対話や、様々な学生支援の取り組みを通じて、この問題意識が芽生えた、というのが正確な表現だろうか。



上空から見たアルプス山脈

この問いを立てた背景として、留学に興味はあるものの、実際に希望するまでの一步を踏み出せずにいる学生の存在がある。留学してみたい気持ちはあるが、語学力が足りず躊躇っている、費用や治安の面で不安がある等、様々な理由から足踏みしてしまう学生が一定数存在する。これは潜在的な留学希望者が少なからずいる、と言い換えることができるだろう。しかしながら、留学と他の事象を天秤にかけて希望を取り下げているとすれば、優先度はそれほど高くないとも捉えうる。留学の必要性をあまり感じていないのでは、と考えてみた。

本学では、学生に対して自分自身で留学先の情報収集を行うよう、指導しているケースが多い。これは何も留学先に限ったことではなく、それに付随する奨学金や日常生活についても、同様のことが言える。語学力向上を図るための課外講座、学生の勉学に配慮した時間割や価格設定、レベル分けを行っても、中々参加者を得られないという状況も目の当たりにしてきた。英語による授業科目では、日本人学生の履修者数が伸び悩む。あくまでも一例に過ぎないが、こうした周辺情報を踏まえると、根本的な問いとして、そもそも実際上の問題として留学の需要があるのだろうか、特に学部生の段階においては賛否があると感じていた。

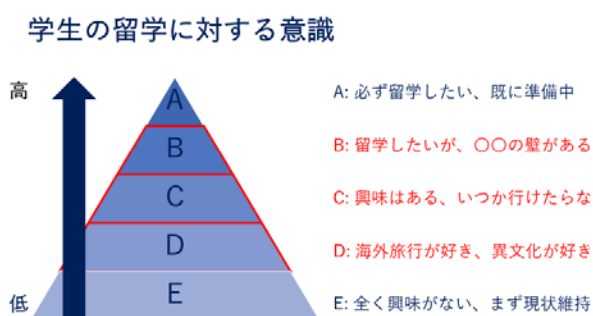
筆者にとっては、この問題意識こそがジョン万プログラムへの応募を決意する大きな原動力となった。ASEAN 拠点という選択肢もあったが、学生の流動性に着目すると、やはり陸続きであり、後述するエラスムス・プラス¹、といういまや欧州の学生交流を語るうえでは欠かせないプログラムの存在がある。こうした理由から欧州を舞台とすべきであると考え、ドイツの欧州拠点への派遣を希望したという経緯がある。

¹ 駐日欧州連合代表部 HP (https://eeas.europa.eu/delegations/japan/18702_ja)

2. 学生を取り巻く現状

欧州拠点が設置された 2014 年以来、欧州地域から本学への留学生受入れ者数は堅調に伸びてきた。それを象徴する事例として、全学学生交流協定による交換留学者数の増加がある。確かな因果関係は見出せないが、5 年という歳月を経て、同協定による交換留学生の受入れ者数が 2 倍以上に増加したという事実が存在する。その一方で派遣者数は横ばいで推移しており、伸び悩みが顕著である。もちろん、これらを単純比較することはできない。2008 年の留学生 30 万人計画²等に端を発し、各大学でも留学生受入れ施策が重視されてきたことは記憶に新しく、留学生受入れ者数の増加は驚くべきことではない。他方、派遣者数は横ばいでの推移が続く。これは捉え方によっては由々しき事態であり、欧州拠点の参加する全学海外拠点等連絡会や、今年度から本格的始動した欧州拠点アドバイザーミーティング等において、度々話題に取り上げられてきた。

こうした議論を通じて、欧州での駐在を開始して数ヶ月が経過した頃には、派遣留学者数の伸び悩みが抱える潜在的な課題も次第に透けて見えるようになった。前章で述べたはたして留学は必要か、という自問自答を肯定的に捉えて、派遣留学者数を増やすためにはどうすれば良いか、複雑に絡み合う問題点をできるだけ簡略化して単純明快な問いを立てることにした。これまでに得た知見や欧州拠点に届く学生の声、留学生支援に携わる方にも意見を伺いながら、「学生の留学に対する意識」(下図参照)と題して、研修生として考察を進めていくための仮説を立てた。現状をかみ砕いて分類するには役立つであろうと考え、考案したものである。まず留学に対する意識を A～E の層に分類し、端的に定義づけをする。そのうえで、各層が有する特徴を洗い出し、留学を希望する潜在性がある層はどの層なのかという点に着目することにした。



まず A 層と E 層については、限りなく 100% または 0% に近いと捉えると、考慮する必要がない。B, C, D 層については様々な留学への意識に対する阻害要因が考えられ、特に B 層では「語学力が足りない」、「治安が心配」、「性格的に自信がない」、「奨学金はもらえるのか」、「授業が忙しくて考える余裕がない」、「卒業を遅らせたくない」、「就活への影響が心配」等多岐に亘る。これら一つひとつに働きかけるべく、課外の語学講座や奨学金情報の発信、カリキュラム上の配慮等、全学的な留学促進施策や各部局の自助努力により、間違いなく取り組みの充実が図られてきた。それでも派遣留学者数は中々伸びない。少し視点を変え、C, D 層を B 層に引き上げる取り組みが実現できれば、B 層が厚くなり、派遣留学者増加の底上げに繋がるだろうと考えた。

² 文部科学省 HP (https://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/ryugaku/1420758.htm)

3. ジョン万職員としての研修

1年という限られた派遣期間の中で、如何にして拠点のミッションである「職員の国際化³」に相応しく、かつ筆者自身の問題意識に即した研修機会を創出できるか、着任当初から検討を重ねた。幸いなことに、それまで半年間だった派遣期間に1年間という選択肢が加わったことで、筆者はより長い派遣期間を選択、その検討に充てる時間は十分だった。そこで、「職員の国際化」という命題に加え、研修機会の創出を通じて、欧州拠点の教育研究の支援活動に少しでも貢献することに注力した。



ハイデルベルクのカール・テオドール橋

過去のジョン万職員に比して検討する期間は十分であった一方、白紙の状態から研修機会の創出を具体化していく過程は、そう簡単ではなかった。特に、2019年度は会計処理や広報活動、主催行事の実施、他機関への出張といった拠点活動に加え、同年度ならではの大きな業務があった。具体的には、欧州拠点紹介冊子の改訂、欧州データ保護一般規則 GDPR への対応、HeKKSaGOn 学長会議の開催支援、そして同年度最大の行事だった欧州拠点5周年記念式典である。もちろん、これらも「職員の国際化」という観点では立派な研修機会と言えるのだが、第2章の検討に即した計画も、並行して検討を進めておく必要があった。

本筋に戻るが、筆者の立てた仮説を実行に移すため、まずは学生の流動性を高めるための、あるいは留学の動機づけを促すための効果的なアプローチについて、欧州の事例を収集することにした。そこで、陸続きである欧州における学生の流動性、そして欧州で学ぶことの魅力に着目した。その手法としては、学内で盛んに実施されている学生アンケート等を中心とした量的調査ではなく、現地でしか成し得ない訪問による聴き取りや対話を通じた質的調査を中心に据えた。その理由として、欧州拠点は、日頃から欧州の大学や研究機関への訪問による活きた情報収集を行い、ミッション遂行のための活動の軸に据えていたためである。筆者としても、実際に対面で話を聞くことで、こちらの用意した特定の質問ではない答えを相手方が「紡いで」くれることに期待を寄せた。

幸いにも、筆者は学生だった頃にフィールドワークを軸とした質的調査の門を叩いた経験があり、幾ばくかの心得があった。それらを回帰しつつ、上述のような方法で調査を進める決意をした訳である。では具体的に、何を目的として、誰を対象者に、どのように調査を進めればよいか。筆者はその手段を、学生の流動性を高める、あるいは留学の動機づけを促すための事例収集を目的として、派遣や受入れに関わる欧州の留学担当者や現地に留学中の本学学生を対象に、対話を通じた情報収集を試みることにした。少々荒い設定ではあるものの、限られた期間を最大限に活かすことを第一として、行動を開始することにした。

³ 欧州拠点 HP (<https://www.oc.kyoto-u.ac.jp/overseas-centers/eu/about/introduction/>)

4. 欧州における学生の流動性

事例紹介に先んじて、ここでは欧州における学生の流動性や学生交流を語るうえで欠かせないものを2つ取り上げたい。1つがエラスムス・プラスというEUの枠組み、もうひとつが短期プログラムの欧州サマースクールである。

まず、エラスムス・プラスについて、簡潔に概要を述べたい。このプログラムは欧州委員会が主催し、2014年から2020年の間に最大400万人以上が他国での学習（海外留学や研修を含む）や職業訓練、職業教育を受けられるようにするための助成金プログラムである。EU28ヶ国と域外6ヶ国が **Programme countries** として参加することができる。日本はホストとして参加できないものの、**Other partner countries** という枠で一定のプログラムに参加することができる。資金の支給要件はプログラムによって異なるが、7年間で総額147億ユーロという莫大な資金が投入されている。さらに、次期にあたる2021年から2027年の7年間においては、対象者を1,200万人程度の規模に拡大、予算も総額300億ユーロと倍増が予定されているというから驚きだ。現行の枠組みでは、日本も **International Credit Mobility**（略称ICM）、エラスムス・ムウンドゥス修士課程ジョイントディグリー（略称EMJMD）等に参画することができる。特にICMは短期留学（3~12ヶ月）であるため、EU域外との交流活性化に大きな効果を発揮している。詳細については **Programme guide**⁴を、同プログラムが欧州に与えている影響については **Impact Studies**⁵を参照されたい。



欧州通貨の象徴ユーロタワー

他方、欧州のサマースクールは、各大学が趣向を凝らして開催する夏の短期留学プログラムである。期間は数日から数週間と、大学や開講コースによって様々だが、世界各国から学生が集い、語学やその地の文化と歴史、各研究室が提供する専門性の高いコース等を受講することができる。多くの場合、地元学生との交流イベントや週末の日帰り旅行が組み込まれ、異文化交流を深める仕掛けも散りばめられている。欧州拠点の位置するハイデルベルク大学のように90年以上の歴史を誇るものから、最近開始したものまで非常に多様である。

これらの取り組みがどのような形で欧州における学生の流動性に影響を与えているか、その創意工夫をどのように、筆者の立てた仮説に役立てることができるか、拠点の活動における出張機会を活用して、事例収集を図ることにした。次章では、研修機会として設定したエストニアのタルトゥ大学、そして英国のキングス・カレッジ・ロンドンへの訪問記録、本学からの派遣留学生への聴き取りをもとに学生の流動性を示す具体例を紹介したい。

⁴ Erasmus+ Programme guide (https://ec.europa.eu/programmes/erasmus-plus/resources/programme-guide_en)

⁵ Erasmus+ Impact Studies: Factsheet (https://ec.europa.eu/programmes/erasmus-plus/resources/documents/erasmus-impact-studies-factsheet_en)

5. 欧州における事例収集

5-1. エストニアの事例

訪れたタルトゥ大学は、エストニアの首都タリンに続く第二の都市タルトゥ中心部に位置する。1632年、当時のスウェーデン国王により創立された歴史ある大学で、4学部を有する。学生数は約13,000名、そのうち留学生が20%弱を占める。規模としては本学の半数ほどだが、研究に重きを置くエストニア随一の総合大学として、存在感を示している。



タルトゥ大学正面

同大学の留学担当者とは、2019年5月に参加したドイツのゲッティンゲン大学主催、Erasmus Staff Training Week という研修プログラムで知り合い、これが訪問の大きなきっかけとなる。このような一期一会の機会を積極的に活用して、次の取り組みに繋げていくことは、欧州拠点の一員として活動する醍醐味であると言える。タルトゥ大学については、同国における学生の英語運用能力や、日本人学生の受入れに積極的である等の情報を得て、学生交流に関心を持った。調べを進めるうちに、IT先進国としてのエストニアや、EU新興国で他大学をけん引するタルトゥ大学に、改めて留学先としての潜在性を感じた。バルト三国との交流はまだ発展途上で、本学との間には全学学生交流協定がない。

同大学における学生の流動性について、特筆すべきは派遣留学者数が伸び悩んでいるという本学と同様の事実だった。ただ理由は大きく異なり、エストニア国内、あるいはEU圏内で十分に国際経験を得られると感じる学生が多く、わざわざ留学する必要性を感じないという。また、語学留学をせずとも、大学入学時には問題なく英語を話すことができることも、背景として理解できた。もちろん、学生の流動性向上に消極的な訳ではなく、先のエラスムス・プラスを積極的に活用している。大学として有する奨学金が十分でない中でどのように流動性を深めていくか、資金の潤沢なEU資金を積極的に活用した交流を重視したい意向があるようだった。EU域外とのICMでは、2015-2018年の間で派遣53名、受入れ100名



旧学生牢の落書き

という実績をもつ。決して大きな数字ではないが、より機動力のあるプログラムをもって、アジアを含むEU域外との学生交流を深めることに注力していることが窺えた。同時に、奨学金等が伴わない協定締結による交流は敬遠されがちだということもわかった。こうした機運は同大学に留まらず、特に自大学や自国の奨学金が潤沢でない場合、同様の傾向を観察することができるだろう。

5-2. 英国の事例

続く事例として、英国キングス・カレッジ・ロンドン（通称 KCL）が主催する夏の短期プログラム、サマースクールを紹介したい。

サマースクールに関しては、欧州拠点としても短期プログラムへの参加が長期プログラム応募への動機づけになるという見立てのもと、ここ数年で学生への広報活動を強化し、積極的に参加を促しているところであった。学生の流動性を高める効果を期待できる取り組みとして、欧州の至るところで開催されている。今回訪問した KCL では、高校生対象、大学の学部生対象と区別をし、目的別にサマースクールを実施している。ここで学部生向けのプログラムに注目したい。毎年 6 月末から 8 月上旬にかけ、開催期間を 2 つのモジュールに分けて開催している。各モジュール 20 程度のコースを設け、全期間で計 1,700 名もの学生を全世界から受け入れている。驚くべきことに、僅か 10 年前に立ち上げ当初 50 名だった参加者が、30 倍以上にのぼっていた。その後、参加者の傾向として短期留学（ここでいうサマースクール）が長期留学（半年や 1 年単位）に結びついているかどうかは追跡していないため、詳細は明らかにできなかった。それというのも、同大学の場合、短期から長期に結び付けたい等の意図や直接的なリクルート活動を目的とせず、より専門性の高い研究分野の活動紹介に主眼を置いていた。語学学習を中心とするプログラムとは一線を画していると言える。

予算に関しても基本的に大学からの持ち出しはなく、全て参加者の受講費で賄われているそう。さらには、特定の協定校に対する受講費の免除や各学生への奨学金制度を設けていて、サマースクールの期間中は、通常の学生と同様のサービスを手にすることができる。このあたりに、多くの参加者を惹きつける仕掛けがあると感じた。また、これだけ参加者（受け入れる学生）が多いと、言わずもがな至るところで異文化交流が生まれる。参加者同士のみならず、彼らをサポートする同大学の学生とも交流が生まれ、相乗効果を発揮するのである。学生の流動性を考えるうえで、必ずしも学生を送り出す派遣留学が全てではなく、受入れプログラムを工夫して、積極的に優秀な学生を呼び込めば、自大学にいながら国際交流を創出することができる、ということを改めて考えさせられる訪問となった。

留学への動機づけが同大学における開催の目的ではないが、学内の協力を最大限に得てプログラムを拡大してきた副産物として、いわば「地元」の学生に刺激を与えていることは言うに及ばない。



玄関口キングス・クロス駅



名物の赤いロンドンバス

6. 本学学生の留学体験談

留学の動機づけという観点については、現在欧州に留学中の本学学生と連絡を取り、実体験を収集することにした。本学学生の留学体験談は帰国後に集めれば良い、といった意見があることは重々承知している。しかしながら、これまでの教務経験や拠点駐在中の学生対応を経て、学生と学内の教務掛職員との距離感、学生と拠点員としての職員との距離感は随分違うものだと実感していた。単に感覚的なものだろう、と言われればそれまでかもしれないが、実際に学生と対話する機会を設け、試みしてみる価値はあるという確信があった。

主催イベントで準備段階から学生の力を借りつつ、プレゼン機会を創出して彼らの国際化を図る欧州拠点と、授業の履修登録や奨学金の採否、卒業判定等、特に厳しい事を告げる機会も少なくない教務系職員では、職務上の立場や役割が大きく異なる。同じ京都大学の職員であり、学生支援に対して熱心であるという共通の心得はありつつも、である。

そこで、筆者は出張機会の多い欧州拠点の活動を有効活用すべく、訪問大学や付近の大学に留学中の本学学生に連絡を入れ、対話の時間を設けた。できるだけ彼らの本音を訊きたかったため、特定の質問項目は設けず、ざっくばらんな対話形式を心がけ、留學生活の胸中に耳を傾けた。すると、志望動機や留學生活の様子、楽しみや苦勞をあますところなく語ってくれ、現在進行形の非常にリアルな体験談として、計7名にお話を伺うことができた。

例えば、志望動機ひとつとっても、自身の問題意識であった移民問題、欧州でしか学べないEU法に関する知識、自身の興味からドイツ語圏に関心を持った、留學してみたいという純粋な気持ちと十人十色といった具合で、非常に興味深かった。それと同時に、彼らのような学生の声を、第3章で述べたC,D層の学生に対し、欧州の魅力としてしっかり届けていくことが、我々の役割であると感じた次第である。

拠点に帰任後、それらをフェイスブック用の記事として書き起こし、毎回投稿した。思いのほか反響が大きく、計7名という決して多くはない数だが、留學中の学生との対話を経て、欧州に留學することの確かな魅力を教わり、手ごたえを感じることができた。これらは今後も継続性を持たせることができるよう、留學体験記「欧州の魅力を紡ぐ京大生⁶⁾」シリーズとして、欧州拠点ウェブサイトにもまとめているため、ぜひ参考にしていただきたい。

この場をお借りして、慣れない留學生活と奮闘しながら、授業や研究、そして課外活動に励む合間を縫い、協力を申し出てくれた学生に心より感謝を申し上げたい。



ハイデルベルク大学広場のクリスマス

⁶⁾ 欧州拠点 HP (https://www.oc.kyoto-u.ac.jp/overseas-centers/eu/study/student_reports/)

7. どうして留学が必要か

一旦、ここまでの展開を振り返っておきたい。冒頭で述べた「1. はたして留学は必要か」という問いに筆者なりの答えを見出すべく、留学は必要であるという肯定的な前提のもと「2. 学生を取り巻く現状」で、留学に対する意識に関する仮説を立てた。それと同時に、「3. ジョン万職員としての研修」で述べた研修機会の創出について検討し、「4. 欧州における学生の流動性」では、調査の鍵となり得るプログラムに着目した過程を記した。

そのうえで行った実地調査のうち、「5. 欧州における事例収集」では、限りある学生生活を最大限に活かすエラスムス・プラスやサマースクール等の短期プログラムに主眼を置く取り組みの重要性について、改めて認識することができた。また、「6. 本学学生の留学体験談」で述べてきた取り組みでは、欧州で学ぶことの実感ある魅力を学生たちから教わった。特筆すべきは、議論や課題として出されるエッセイを中心とした欧州独特の授業スタイルで、日本人学生は慣れない環境にただ圧倒されることも少なくない。しかしながら、それこそが留学の醍醐味でもあり、語学力の向上のみならず、異文化交流や高い教養の獲得にも繋

がる。この点について、詳しくは欧州拠点の発行する年末レター *Season's Greetings*⁷ (左図参照) に記事を掲載しているため、そちらを参照されたい。例年、年の瀬のご挨拶として、このレターを各協定校や日頃お世話になっている関係者に届けているのだが、本記事について、某大学の教授から関心を寄せる反応をいただいた。研究者としてもこうしたテーマを大きく取り上げようとしている事実は、研修生であることのみならず、教務系職員として大きな自信に繋がった。

どうして留学が必要か、非常に限定的な考察ながら、与えられた1年という派遣期間を最大限に活用し、多様な短期プログラムの活用度の高さ、そして欧州で学ぶことそのものの魅力であることに説得力を持たせることができたのは、大きな収穫だった。ただ、情報をどのように整理し、届けていけば良いのか。

Thoughts about Student Mobility during my Stay in Europe

Written by Yumamoto Shu (John King Program student)

Im working as a trainee at Kyoto University European Center for one year. During my stay and due to my academic background in Educational Studies, I wanted to find out more about student's motivation to study abroad from an educational perspective. In order to find ways to encourage students, the following questions are essential to me. What is the benefit for students studying abroad? What motivates them? How can we support them?



Kyoto University exchange student at work

I believe that studying abroad can reveal students' hidden potential and has a strong influence on their studies, careers and lives. There are some obvious benefits such as acquiring new language and professional skills. Nevertheless, it also has not so obvious effects. In an interview series with exchange students from Kyoto University, I found out that they experienced a variety of cultural shocks – but mostly in a positive way. For instance, “discussions” are an essential part of classes in European universities. Many Japanese students seem to struggle with this at first and usually say it is tough in the beginning to join in. However, they gradually adapt and even find it stimulating after some time. Outside the classroom, they also get new perspectives through different challenges on campus and in their daily lives, thereby giving them an opportunity to reflect upon themselves and their backgrounds.

Despite this, what motivates students to study abroad? In the same set of interviews, I found several examples that sparked their motivations. Some students say that they wanted to conduct specific research or understand global issues from a European point of view. Others say that they were curious about the multilingual and multicultural environments in Europe. Thanks to close partnerships among European universities, students can take classes with students from all over Europe and exchange their thoughts with people who have diverse backgrounds. They also enjoy the proximity of different countries and the chance to encounter different cultures and lifestyles.



Her time spending with students from Kyoto and Germany

When thinking about student mobility, I always keep asking myself “How can we support them?” Crucial parts of the answer are funding opportunities, improvement of language skills. It is also necessary to provide practical information of partners and make curriculum or credit transfer systems more flexible. Equally important is the individual support for students in accordance with their abilities, needs and motivations. Therefore, I firmly believe that we should listen to students more actively and more carefully in order to assist them on their endeavors and help them to flourish. This ought to be a key value to our mission of supporting educational activities.

Check out some lively hand reports by Kyoto University and European students and lecturers about their experience abroad!



Greetings from Kyoto University European Center's Staff

The Kyoto University European Center staff members wish you a prosperous Year of the Rat, which marks the beginning of a new cycle in the Japanese astrological calendar.

It's always a pleasure to work with you. Wishing you good health, happiness, and good cheer in the coming year. まいごちを! Akiyama Ken

Narae vasa adaladitatu ahi sojovaa. She'll be with you at whatever moment 2020. Receive you our warmest wishes. Sakamoto Tsubasa

We treasure every encounter as things you only start from there. Thanks to all of you we met for the past 5 years and we will meet for the year to come! Kaneko Chiyoko

本学で5年間勤務させていただきました。1年が過ぎました。今年もぜひのびのびと楽しんでください。 Bernd Richter

May the New Year bring us more wonderful opportunities to work together. Warm wishes for 2020. 今年も一緒にがんばりましょう! Mori Tomoko

Ti ringrazziamo per la tua ospitalità. Siamo felici di poterci incontrare a Kyoto. Auguriamoci buona Notte e felice anno nuovo! Sgranki Taraki

Vielen Dank für Ihre freizeitspende. Universitätsrat. Wir freuen uns darauf, auch im nächsten Jahr mit Ihnen zusammenarbeiten zu dürfen. Yin Yamamoto Shu

Wishing you a prosperous link created with Kyoto University's ASEAN and European Networks. “Sawaddee-Christmas Eve!” (Thai) Sonobe Hiro



Kyoto University European Center
Augustinergasse 2, 69117 Heidelberg (Studentenkarzei, Ruprecht-Karls-Universität Heidelberg)
Phone: +49 (0)6221 34 30034 | Email: info_eu@oc.kyoto-u.ac.jp
Web: <https://www.oc.kyoto-u.ac.jp/overseas-centers/eu/eu/>



Notice: We would like to keep you informed about our activities and events in the future. If you do not consent to us doing so, please contact us via email.

Season's Greetings

Thoughts about Student Mobility during my Stay in Europe

⁷ 欧州拠点 HP (<https://www.oc.kyoto-u.ac.jp/overseas-centers/eu/mailnews/>)

8. 今後の展望

短期プログラム情報を折り込む形で、欧州で学ぶことの魅力を届けていく、如何にして伝えていくべきか、第3章で述べたC,D層の学生をB層に引き上げるには、どのような方法が考えられるか、筆者なりの見解を述べたい。

C,D層の学生が有する「興味はある、いつか行けたらいいな」、「海外旅行が好き、異文化が好き」といった興味・関心、好奇心を如何にしてB層の留学希望まで引き上げることができるか、これらを考えの中心に据えた。時を同じくして、欧州拠点ウェブサイトの改修案が浮上していたため、本考察のタイトルである「欧州で学ぶ」と銘打った特集ページを設けることにした。そこには、本学が全学学生交流協定をもつ大学のある国、その魅力について留学のイメージを少しでも持ってもらえるよう工夫して国別に紹介しつつ、各協定校の情報を端的に盛り込んでいる。執筆時点ではページ構築中だが、近々公開される予定である。

研修機会のみならず、筆者が派遣期間の休暇を利用して旅した欧州の34ヶ国、各地で撮りためた写真等もここで一挙に放出し、特集ページに活用した。これらの情報がどの程度学生に届くか、あるいは響くのか、実際のところは蓋を開けてみないことにはわからない。ただひとつ、その粗さは否めないものの、非常にやりがいと達成感のある考察だった。

最後に、本稿の執筆にあたってご協力くださった学生、欧州の大学関係者、そして本学教職員のみなさまに対し、ひとえに感謝の意を表したい。この1年間に培った経験は、あまりにも貴重で、今後の人生において糧となり、宝となるであろう。

あとがき

最後に、筆者の経験した新型コロナウイルスを巡る日常の変化について、少し述べておきたい。東アジアに続いてイタリアを中心に爆発的拡大を続ける欧州では、日を追うごとに日常が移り変わっていった。各国首相の演説がニュースで流れた翌日には新たな施策を発動、帰国を余儀なくされるまでの一週間、そんな目まぐるしい日々を体験した。欧州に滞在する学生の帰国支援、欧州拠点からの駐在員引き上げ、変わりゆく街の景色を後に、慌ただしく帰国の途に着いた。長い冬を終えて、桜の開花とともに人々が待ちわびていた春の訪れを感じつつ、イースターを前に活気づくはずが、ハイデルベルクの街に人々の姿がない。渡航や出入国、日常生活への制限が強まる中、人々が励まし合う姿には大変勇気づけられた。

日本国内も予断を許さない状況が続く中、研修の最後にこのような貴重な体験をできたことを前向きに捉えたい。このような体験をしたジョン万職員は後にも先にも私ひとりであろう。一日でも早く、人々に平穏な日常が戻るよう、学生たちが国際舞台で活躍できる環境が戻ることを願い、本稿の結びとしたい。